

郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。
阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

日亜化学の礎を築いた創業者

小川 信雄

信雄は明治45年（1912）7月9日、那賀郡長生村（現阿南市長生町）に出生した。

世の中は不景気であり、農家の子どもで学校に行ける者は少なかつたが、信雄は苦しい生活のさなかにあっても学業と農作業を両立し、小学校・中学校を首席で卒業した。昭和7年（1932）に徳島高等工業学校応用化学科製薬部



小川 信雄 氏

へ推薦で入学し、学校創立以来初めてとなる陸軍依託生徒に採用される。

昭和11年（1936）、陸軍軍医学校薬学科を上位で卒業した信雄は、将校として満州奉天に向かう。支那事変が勃発した際は、リソゲル液（輸液）の大量生産を戦場で成功させ、高い評価を得た。軍医学校甲種学生として東京に戻ったのちは、蛍光板を用いたレントゲン装置を開発し、画期的な成果をあげた。太平洋戦争勃発後は、薬剤大尉として南方の島々を転戦する。フィリピン・ミンダナオ島に上陸した時、初めて米国製の蛍光灯の光を見て驚嘆した。「戦争が終わったらこれを超えるものを作ってやろうと思った」と後に語っている。

終戦となり、裸一貫で復員した信雄は独立のため郷里へ帰ることを決意する。この時から、信雄の夢だった蛍光灯等の技術開発の研究が始まった。

昭和23年（1948）9月、新野の地に協同医薬研究所を開設した。県南部が良質な石灰石の宝庫であることに着眼した信雄は、石灰石の利用研究から結核治療薬ストレプトマイシン用無水塩化カル

シウム製の製法を考案し、大量生産方法を確立した。また照明用蛍光体原料の無水リン酸カルシウム製法も開発し、社業の基礎を築いた。

昭和31年（1956）、協同医薬研究所は日亜化学工業株式会社として新しく発足した。日本の「日」と亜細亜の「亜」から「日亜」の社名が生まれた。日本だけでなく世界を相手にした事業をめざす信雄社長の志の表れである。当時の主力商品であった蛍光体用リン酸カルシウムは、新日本電気（現NEC）から世界一の評価を得、フリップス社・米國シルバニア社・東芝・ソニー・松下電子工業（現パナソニック）など世界のトップ企業にも認められ、信雄と社員の執念が実を結んだ。

信雄は平成元年（1989）3月に社長を引退したが、創業の精神は後継者の小川英治社長に受け継がれ、日亜化学の技術者たちが世界一のものづくりに取り組んだ努力の成果は、新たな製品となつて世に送り出されている。

平成5年（1993）11月、日亜化学が開発した青色LEDは従来の100倍の明るさで世界的な発明として報じられた。3年後、蛍光体と青色LEDを組み合わせ



創立の頃

た、独自技術による白色LEDを開発する。この白色LEDは、照明やディスプレイなどに用途が広がり、世界の人々の生活を変え、新しい産業の創出につながった。

信雄は愛郷心が強く、郷里への経済的支援も惜しまなかった。数々の功績により、平成11年（1999）、阿南市名誉市民の称号が贈られた。平成14年（2002）9月6日、郷土の誇りとなった信雄は、多くの人に惜しまれつつ90歳の天寿を全うした。

次回1月号は、郵便はがきの考案や駅通史編さんなどを行った青江 秀氏です。

文化振興課 ☎ 22-1798 問い合わせ